

日本語教育における アカデミックライティングの授業の試み

木戸光子

要 旨

本稿では、1999年度2、3学期に筆者が担当した学部留学生・帰国子女対象の「日本語作文Ⅱ-2」の授業について報告する。この授業では、章立てのあるレポートを書くことを目標に、アカデミックライティングをめざした日本語作文の教科書を使用し、学習者が書いてきた作文を毎回お互いに比較検討しあいながら、文章構成や表現を学んだ。この授業を通して、教科書の使い方やモデル文章の文章構成の応用の仕方など、上級の日本語学習者に対する作文指導の課題が明らかにすることができた。

【キーワード】 アカデミックライティング 文章構成 モデル文章 上級日本語学習者

Teaching Japanese Academic Writing to Foreign/Returnee Students at the University Level

Kido, Mitsuko

This paper is a report on the course of "Japanese composition II -2", which I taught to foreign and returnee students in the fall and winter trimesters, 1999-2000. The goal of this course was to write reports divided into sub-sections using a Japanese composition textbook for teaching academic writing. In this course students learned about the structure and expressions used in Japanese written discourse by examining and comparing the compositions each student wrote every week. This course shed light on issues related to teaching composition to advanced learners of the Japanese language; specifically, ways to use a textbook and apply the discourse structure of model written passages to a course on academic writing.

1. はじめに

本稿では、日本語作文Ⅱ-2（筑波大学 1999年度2、3学期）の授業について報告する。この授業は、学部留学生・帰国子女対象の日本語・日本事情科目で、上級の日本語学習者の作文力を伸ばすことを目的に、特に、大学での勉学に必要な作文力を身につけるためのアカデミックライティングをめざした。

上級の日本語力のある留学生でも、レポートを書けるような日本語の作文力は不足している場合が多い。日常の身近な話題や時事問題について日本語で作文を書くことはできても、大学の授業で要求されるレポートや論文、口頭発表の資料に使われるような文体、語彙、文章構成には慣れていない。このような留学生に対してアカデミックライティングの授業は大学での勉学の助けになる。

そこで、この授業では大学で学ぶ留学生のアカデミックライティングに焦点をあてた教科書『留学生のためのレポートの文章』（二通信子・佐藤不二子、凡人社、1999年）を使用した。この教科書は大学のレポート作成に必要な項目として次のようなことが学習できるようになっている。

レポートに使われる文体、文の基本、段落の書き方、仕組みの説明、歴史的経過の説明、分類、定義、引用、要約、比較・対照、因果関係、論述、資料の利用、レポートの実例

2. 授業概要

授業の概要は次のとおりである。

期間 - 1999年9月～2000年2月、計20週、週1コマ（1コマ＝75分）

対象 - 学類留学生および帰国子女学生

（注：筑波大学では学部ではなく「学類」と呼んでいる）

目標 - レポート作成技術を身につけること

受講者 - 計3名

留学生2名（学類2年生1名、短期留学生1名）

帰国子女の日本人学生1名（学類2年生1名）

その他、3学期途中で受講を取り消した留学生1名（学類2年生）

実際の授業は、教科書の目次の順番にそって、2週で1課分を行った（授業進度については付録資料1の授業シラバス参照）。1週目は、課のモデル文章を読解しながら文章構成や文型を学習し、課題作文を宿題とした。2週目は、各学習者の書いてきた宿題の作文をコピーして全員で比較検討しながら添削していった。3週目に、書き直した作文を再提出させた。

この授業で重視したことは次の3つである。

（1）文章構成力の養成

ある話題について、情報を集め、自分の意見を盛り込んで書く際、ある程度長い作文を書くことにより、どんな事実や意見をどんな文章構成で書くかが重要になってくる。そこで、学期末のレポートは、章立てをして書くことを課した（学期末レポートの課題については付録資料2参照）。章立て

をすることで、全体構成がはっきりし、何をどんな順番に並べたら自分の言いたいことがよりよく伝わるかを考えるきっかけになる。短い作文で段落分けを練習するより、章立てをして各章の見出しを考えることで、自分が書こうとしている内容について全体の中での位置づけが明確になる。あとで書き直すときにも、章立てがあったほうが順番をかえるなどの移動がやりやすくなる。

(2) 公開性

作文を授業内、授業外で公開することにより、自分の書いたものに責任を持つよう自覚してほしいと考えた。つまり、文献等から引き写しただけの長い引用や、感情的な論調をなくし、レポートや論文にふさわしい客観的な態度に貫かれた作文をめざしたのである。授業では、学習者の作文はコピーして、教師だけでなく学習者全員が読むようにした。また、学習者の書き直し原稿はフロッピーディスクまたはEメールで提出させて、教師の運営するホームページに載せて公開した。

(3) コンピュータ・リテラシー

コンピュータを使うことで、作文を書く労力が減り、毎回課せられる課題をこなしやすくなると考えた。そこで、日本語ワープロソフトを使いこなし、インターネットで情報を検索することを前提とした授業をした。ワープロを使うことで漢字を書いたり語彙を調べたりする時間を減らせ、インターネット検索により情報検索も簡単になるからである。課題作文は必ずワープロ原稿で提出し、添削後の書き直し原稿を必ず提出するようにした。課題作文の参考文献として、本や雑誌だけでなく、参照したホームページも載せるように指示した。

3. 授業をして気がついた点

授業終了後、受講者から出た感想をふまえ、この授業で問題となった点について詳しく述べる。(2)であげた方針の、公開性、コンピュータ・リテラシーの重視は、この授業ではだいたい達成できたと思う。その一方で、文章構成力の養成をめざした学習に取り組む中で、教科書の使い方や作文授業の進め方、モデル文章と学習者の書く作文の文章構成の微妙な違いなどが問題点として浮かび上がってきた。

3.1 学習者の習熟度と教科書の使い方

今回の授業では、教科書の目次の順番にそって、モデル文章の説明をしてその課の文型などについての練習問題をしてから、400-800字程度の課題作文をする、というやり方で授業をすすめた。しかし、同じぐらいの文法理解力のある上級レベルの学習者の中でも、次のaとbの学習者には、この教科書の使い方を変えたほうがよかったと思う。

< 学習者の習熟度 >

- a . 日本語の文章を書く力がまだ不十分で、文法の誤用がかなりある、話しことばの調子で文章を書く、といった日本語の表現の問題が残っている学生
- b . 文法的に正しく語彙も上級にふさわしい日本語の文章が書けるが、文章構成を整える、文章の種類を書き分ける、といった文章全体に関することに問題がある学生

a の学習者にはこの教科書にそった授業でもよいが、b の学習者には教科書を適宜必要なところだけ参考にするような授業のほうがよかったようである。例えば、b の学習者のための授業では、はじめに興味のあるテーマについて少し長い文章を書かせて、その文章の中で使われなかった項目(図表の説明、分類など)のみ教科書で短文練習をして、もう一度はじめに書いた文章を書き直させる、といった方法が考えられる。

その際、はじめからワープロで文章を作成させると書き直しがやりやすくなる。今回の授業では文章を書く宿題はすべてワープロ作成にしたが、学生は全員書き直しの課題をきちんと提出してきた。手書きだと書き直しが不要なところまでもう一度書くことになり、再提出しにくくなる恐れがある。

今回の授業では、a と b の両方のタイプの学習者がいた。授業後に a の学習者に聞いた感想では、授業目的があいまいで中途半端な印象を持った学習者もいた。文法的に正しい文で作文を書くといった表現の細かいところの正確さと、文章の全体構成の適切さと、どちらに焦点があるのか、よくわからなかったとのことだった。一方、b の学習者はどんなことでもすべて勉強になったと感想を述べていた。

3 . 2 学習者が作文を書く際の問題点

(1) 教科書のモデル文章の文章構成の意図がよくわからないまま作文を書いている

文章構成の型を利用する際、どうしてそのような型を使うのかという文章構成の意図を学習者が十分理解しないまま、課題作文を書いていることがあった。しかし、全員の文章をコピーしてみんなで意見を出し合いながら添削していく中で、自分の作文と他の学習者の作文が似ていて異なるのはどういう点かを意識し、無意識に使っていた文章構成の型の意味が改めてわかってくるようだった。

例えば、「～は～に分けられる」、「第一に」、「第二に」、「まず」、「次に」などの分類に使われる表現は、わかりやすく、留学生にも簡単に使えるように見える。しかし、文章構成として文章全体の意図を考えると、使いにくい表現でもあるようだ。

例として、各国の教育制度についての課題作文の前半の部分を挙げる。これは、教科書の「仕組みの説明」という項目にある課題作文である。

課題 下の図は日本の学校制度を簡単に示したものである。以下の条件で、日本またはあなたの国の学校制度について説明する文章を書きなさい。(図は省略)

< 条件 > 1 . 長さは原稿用紙 1 枚 (400 字) 程度。

2. 以下の3段落の構成で書く。

第1段落 - 学校制度の全体的構成

第2段落 - 義務教育段階

第3段落 - 高校以上の教育（以上、教科書より引用）

以下、この課題について学習者の書いた作文（一部改変）を例に挙げる。なお、**義務教育**は筆者が後から囲ったもので、ここから課題の「第2段落 - 義務教育段階」義務教育の詳しい説明が始まっている。

例1 学生(ニュージーランド)の作文

簡単に見ればニュージーランドの教育制度は他の国のと同じように見える。他の先進国のように教育制度が十分発展しており、教育は大事なものだと考えられている。しかし、ニュージーランドの教育制度は多くの国のと違う点もあり、教育の自由は特に特徴的だと言える。

型だけを見れば、ニュージーランドの教育制度は普通の先進国のとあまり変わらないように見えるかもしれない。**義務教育**は6歳から16歳までであるが、ほとんどの子供は5歳で小学校に通い始める。（以下省略）

例2 学生（米国）の作文

アメリカの教育制度は小学校、中学、高校、大学という組織になっています。場所によって生徒が学校にいる期間が違います。小一から小五までが小学校で、小六から中二までが中学校で、中三から高三までが高校なのです。

アメリカでは高校までが義務教育です。（以下省略）

例3 学生（帰国）の作文

日本の学校教育制度は、大きく分けて2つに分けることが出来る。義務教育と高校以下の教育である。

まず第1に、**義務教育**とは、「国民の義務として、一定の年齢に達した子どもに受けさせねばならない普通教育」（学研・現代新国語辞典・金田一春彦編より）のことである。

授業でこれらの作文を検討した際、例1を書いた学習者から、例3のような「学校制度の全体的構成」は何のためにわざわざ言うのか、わかりきったことだから言う必要のないことではないかという意見が出た。事実をそのまま述べただけでは何のためにその事柄を分類するのか意味不明だということだった。

そこで、事実を事実としてありのままに意見を交えず説明することの必要性を話し合った。その時、事実を並べるだけで書き手の意図することを述べる方法について説明した。例えば、缶入りのお

茶がちょうど教室に置いてあったので、それを例にした。お茶についておいしいかどうか説明するとき、おいしい、おいしくない、という評価ではなく、どこのメーカーのか、どんな色か、など事実の説明をする。どのメーカーがお茶作りに定評があるかとか、おいしそうな色や香りがするかとか、共有する背景知識があれば、事実の説明に込められた書き手や話し手の意図を伝えることができる。そうすることで、おいしい、あるいは、おいしくないを伝えることもある。

例3の「～は、大きく分けて2つに分けることが出来る」「第一に」といった分類の表現は、例1の学習者の場合だと、ただ分類の表現を使った文章を読んで、分類の表現のみを使った短い作文練習をただだけでは、その場限りの練習でしかなく、他の作文で使うことはないかもしれない。したがって、ただ読んで書いて添削するだけでなく、このように、授業を通してそれぞれの文章構成や表現の意味を考えることが学習者の作文をよりよいものにするのである。

(2) モデル文章の文章構成の理解にかなりの幅がある

(1) で取り上げた課題作文について、「学校制度の全体的構成」を説明してから「義務教育段階」を説明する、という文章構成はどの作文も同じだが、「学校制度の全体的構成」の説明内容はかなり異なっている。

例1は、先進国を引き合いに出して国の教育制度が先進国と同じだということで、具体的な内容は表現上に示さずに教育制度の説明をしている。むしろ、教育の自由という国の教育制度の特色をはっきり主張している。これは事実の指摘をすることで書き手の主張をはっきり出すやり方だと言える。

例2は、国の教育制度の修学期間を具体的に述べている。事実でもって具体的な内容を説明している。

例3は、国の教育制度を2つに分類しており、具体的な内容は2段落以降で説明している。「～は、大きく分けて2つに分けることが出来る」「第1に」といった分類の表現を使って、「学校制度の全体的構成」を示すとともに、この作文の文章構成の型も示している。

教科書でモデル文章を読んで、文型を学習したあとでも、これだけ異なる作文が出てくる。しかし、この3つは大まかに見れば、「第1段落 - 学校制度の全体的構成」「第2段落 - 義務教育段階」になっていると言えなくもない。学習者それぞれの作文を比較することで、自分の書いた作文の文章構成を再認識できる。また、他の作文を見ることによって、文章構成の応用についても学習できる。

実は、例1を書いた学習者は、事実の記述に自分の意見を入れがちであった。事実のみの説明を要求される課題にも、必ず何のためにその事実を説明するのかといった意見を書く傾向があった。しかし、客観的な態度で書かれているので、決して個人の感情や体験といった独りよがりの印象はない。だが、例3の帰国子女学生から説明がくどいと言われることがあった。この学生の作文は、例1の学習者とは対照的で、事実のみの説明に終始することが多かった。この学生は、インターナショナルスクールで英語で教育を受けたそうだが、日本語の作文は自分の意見を考えて書かなくても事実の説明だけしていればいいのでらくだ、と言っていた。なお、例2の学習者は、作文に自分の体験をそ

のまま入れる傾向があり、客観的態度で書かれた記述でない印象を受けることがあった。

(3) レポートの種類と文章のスタイルのちがいが区別できない

新聞のコラムに書くような意見文とレポートで要求される意見文は、文章のスタイルが異なることが意識されていなかった。例えば、「～について考えてみよう。」「一般に知られているように、」などは、読み手への働きかけが強いが、自分の意見を客観的に述べるレポートでは、問題提起の書き方や意見の書き方も異なる。である体、事実の記述の中に、唐突に働きかけのことばや気配りのことばが出てくるような書き方はおかしい。

専門分野、テーマへのアプローチなどで文章のスタイルが異なることは従来指摘されている。しかし、ここでは、むしろ、事実の報告だけを要求されるレポートか、自分の意見も必要なのか、など、レポートの種類によって文章のスタイルも変える必要があることを意識させなければならない。

(4) 適切な語句の選択ができない

連語、語の文体など、その文章にふさわしい語の選択ができていない。レポートなどアカデミックライティングの日本語の作文に必要な情報が載った辞書が必要だが、そのような辞書は見つからなかった。もしそのような辞書があれば、今回受講した3名の学習者は、教師の助けを借りなくてもレポートが書けるのではないかと思う。

作文のために辞書には、作文によく使われる表現や文章構成の分類を整理したものだけでは不十分である。連語、文体をはじめ、文章構成についてどんな内容の話題や文章の種類で使われるか、使ってはいけないか、また、どんな文章構成がどんな意図で使うと効果的かなどの情報があることが必要だろう。

4. おわりに

日本語教育においてアカデミックライティングをめざすにあたり、学習者の日本語力が上級レベルであっても、3で述べたような問題が出てきた。特に、本稿では文章構成の意図がわからないまま、何となくモデル文章を真似て作文を書くことの危険性を指摘した。日本語教育の授業で習ったことが、学習のための学習に終わらず、実際に大学の授業でのレポートや論文に活用できるようにする必要がある。そのためには、日本語の文章構成に対する深い理解をはじめ、文章の中での語彙の使い方など文章における用法に関する特徴の解明、内容にふさわしい文体、文章の種類についてもっと研究がすすめられなければならない。アカデミックライティングに必要な日本語の文章構成や文章の種類、語や文型などの表現を特定する研究を進めることが今後の課題である。

謝辞 研究目的で作文を使用することを承諾してくださった1999年度「日本語作文Ⅱ-2」の受講者の方々に感謝いたします。

参考文献

1. 木戸光子(2000)「大学における文章表現教育の試み」『日本語教育論集』第15号、筑波大学留学生センター、pp.73-86
2. 二通信子・佐藤不二子(1999a)「留学生のためのアカデミック・ライティング教材の開発に関する研究」『北海学園大学学園論集』第99号、pp.67-84
3. 二通信子(1999b)「文章構造を重視した論理的な文章の書き方の指導」『第15回 日本語教師のための公開研修講座 中・上級指導のために - 文章・談話を構築する』予稿集、pp.17-25、(社)国際日本語普及協会 AJALT、昭和女子大学 1999年6月27日
4. 二通信子・佐藤不二子『留学生のためのレポートの文章』凡人社、1999年(2000年にスリーエーネットワークより改訂版が発行された)

付録資料1 授業シラバス

1999.9.7

日本語作文Ⅱ-2

日時 火曜5限、1999年9月～2000年2月(2学期・3学期)

教室 留学生センター1階 研修室B

担当教師 木戸 光子(きど みつこ)

連絡先 筑波大学留学生センター1階「日本語教官控室」、TEL&FAX:0298-53-6768、
E-MAIL:mitsuko@interc.tsukuba.ac.jp

授業のメールアドレスの場所

筑波大学留学生センター1階「日本語教官控室」のドアを開けて左側
「日本語作文Ⅱ 木戸」と書いてあるメールアドレス

1. 授業目的

- (1) 内容にあった文章構成を考えて、レポートの文章が書けるようになる
論理的な思考の組み立てに基づいて、段落や文章全体を構成していく。
- (2) 作文にコンピュータを活用できるようになる
ワープロで文章を作成する。電子メールでやりとりする。インターネットで必要な情報を検索する。

2. 授業に持ってくるもの

- (1) フローピーディスク1枚(Windows95でフォーマットする)
自分の作文は、かならずテキストファイル形式(ファイル名.txt)で保存する。

(2) 辞書

使い慣れたものならどんな辞書でもいい。

(3) 教科書

『留学生のためのレポートの文章』二通信子・佐藤不二子、凡人社、1999年

注意 大学会館内の書店にある。必ず買うこと。1500円。

3. 宿題

(1) 次の授業の内容について教科書を読んで、課題をやってくる。

文章を書く宿題は、必ずワープロで文章を作成し、プリントアウトしたものとフロッピーディスクをもってくること。

(2) 自分の授業日記

授業日記を書いて、次の授業までに電子メールで教師に送る。

書く内容 その日の授業内容と質問やコメント

4. 授業のホームページについて

この授業の完成レポートは私のホームページ上で公開する予定である。自分の作品を公開することによって、自分の書いた文章に責任を持つことを学んでほしい。

木戸のホームページ <http://www03.u-page.so-net.ne.jp/td5/kidomi/>

「風来坊通信」 「授業のドア」 「日本語作文 -1(1999年2学期)」

「学生の作文紹介」のページ

< 公開する時の注意 >

(1) ペンネームか実名かは自分で決めること。

(2) 一度ホームページに載せた文章でも、書き直して新たなものに差し替えてよい。

差し替える時は、文章のはじめに「 年 月 日更新」と入れること。

5. 成績

出席	10%	ただし、授業時数の2/3以上出席すること
授業での貢献度	10%	授業で積極的に発言し参加すること
宿題・小テスト	40%	宿題を遅れて出すと、評価が低くなる
授業記録	10%	
学期末レポート	30%	
計	100%	評価 A:100-80%, B:79-70%, C:69-60%, D:59% 以下

6. 2 学期の授業予定 3 学期の授業予定は 3 学期最初の授業で知らせる

9 / 7 オリエンテーション (作文を書く・シラバスの説明)

第 I 部 第 1 課 レポートに使われる文体、第 2 課 文の基本

9 / 14 第 I 部 第 2 課 文の基本 (続き)

9 / 21 第 II 部 第 1 課 段落の書き方

9 / 28 第 II 部 第 1 課 段落の書き方

10 / 5 第 II 部 第 1 課 段落の書き方 (続き)

10 / 12 第 II 部 第 2 課 仕組みの説明

10 / 19 第 II 部 第 2 課 仕組みの説明 (続き)

10 / 26 第 II 部 第 3 課 歴史的経過の説明

11 / 2 第 II 部 第 3 課 歴史的経過の説明 (続き)

11 / 9 第 II 部 第 4 課 分類

11 / 16 第 II 部 第 4 課 分類 (続き)

11 / 24 (水) 学期末レポート締め切り レポート課題は後日知らせる

7. 参考文献

作文学習に役立つ本を紹介するので参考にしてほしい。

A. 作文の書き方について

(1) 『論文ワークブック』 浜田真理他、くろしお出版、1997 年、2500 円

文系の留学生が専門的な内容のレポートや論文作成に役立つ。文章の構成の仕方や文型の使い方がわからないとき、参考にできる。

(2) 『実践にほんごの作文』 佐藤政充他、凡人社、1986 年、1200 円

留学生が一般的な内容の作文を書くのに役立つ。

(3) 『理工学を学ぶ人のための科学技術日本語案内』 山崎信寿他、創拓社、1992 年、4500 円

理工系の留学生が専門的な内容のレポートや論文作成に役立つ。文章の構成の仕方や文型の使い方がわからないとき、参考にできる。

(4) 『仕事文の書き方』 高橋昭男、岩波書店、(岩波新書 517) 1997 年、630 円

会社などで仕事をする日本人のための作文の本だが、文章の内容や言葉の使い方を考えるのに役立つ。文章の内容をどのように並べたらよいか、どんな言葉を使ったらよいかなど、正確でわかりやすく説得力のある文章を書くのに大変参考になる。できれば読んでほしい。

B. 日本語の文型について

- (5)『外国学生用日本語教科書中級 文型例文集 改訂版』早稲田大学日本語研究教育センター、1995年、1030円
- (6)『日本語文型辞典』グループ・ジャマシー編、くろしお出版、1998年、3300円

C. コンピュータの使い方について

- (7)『大学生のためのコンピュータリテラシー・ブック』村山皓・赤野一郎編、オーム社、1997年、2500円
- (8)『ホームページ簡単作成マニュアル』魚住しょうじ、中央公論社(中公PC新書24)、1997年、760円

1999.12.7

日本語作文Ⅱ - 2 1999年度 第3学期

授業予定(2学期の続き)

- 12/7 第Ⅱ部第5課 定義
- 12/14 第Ⅱ部第5課 定義、第Ⅰ部第5課 引用
- 12/21 第Ⅱ部第6課 要約
- 1/11 第Ⅱ部第6課 要約
- 1/18 第Ⅱ部第7課 比較・対照
- 1/25 第Ⅱ部第7課 比較・対照
- 2/1 第Ⅱ部第8課 因果関係
- 2/8 第Ⅱ部第8課 因果関係
- 2/15 第Ⅱ部第9課 論述
- 2/22 第Ⅱ部第10課 資料の利用、第11課 レポートの実例
- 2/29 学期末レポート締め切り

学期末レポート課題

題：テーマは自由。

内容についての条件：

文献などから、事実の説明を1つ以上、意見を1つ以上引用すること。

引用したものの出典は、参考文献にも必ず書くこと。

形式：A 4紙4ページ以上。ワープロ原稿と、原稿を入れたフロッピーディスクを提出。

締切：2000年2月29日（火）までにメールボックスに提出。

レポート返却：メールで知らせる。

レポートの書式例：教科書 pp.79-82, pp.94-97 参照

「題」
氏名
1 はじめに
2
3
4
5 おわりに
参考文献

【必ずすること】

- 1．題をつける
- 2．節の番号と見出しをつける
- 3．参考文献を2つ以上あげる